

二十五日

「死」を感じぬ心！ 如何に自由よ

と、記して、次の詩を書いてある。

高き情よ、吾高き情を捨て

將た何所にか至り安んぜん

嗚呼高き情よ。ー

クリスト・ミルトン・ウォーズウォース

これ等は凡て人間の最高の情が

此の地上、此の天下に其の花を開きし也。

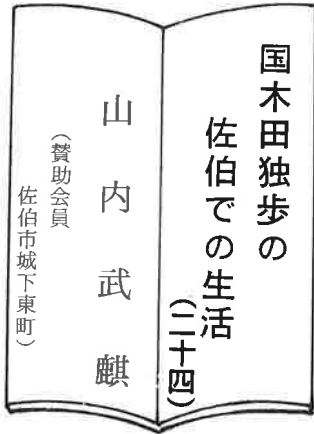
此花は散らざる花なり

此花は最美の花なり

世は不如意なり、故に情は

愈々高く愈々美し

人は此の情をもつ、



此情は人の最後の立場なり、

最後の命なり。

故に人は自由なり、故に人生は希望なり。

嗚呼情よ！我只だ爾を信ず

信ず、信ず、信ずの外能はざる也。

爾は最高の知慧にてある也

と、人の情を讚美している。

次の詩

人の魂よ、ふびんの魂よ 憐れの人よ、

吾なれを懐ふ毎に、あはれの心いやまさる。

哀の心いや動く、心の底の心より

冷たき涙あふれ出す。

此のはてし限りもなき宇宙に

此の冷然たる地球の表面に

五十年の生命を忽然として送り

をちつく先は何処とも。

知らで此世を送りゆく。

嗚呼なれのたま。此の世界に何の意味やある。

なれは只だ生れし故に住みにけり、

月日はなれのままならず、

何時か、何時しか死を呼び来る。

嗚呼魂よ、なれのゆく先何処ぞや。

地球よ、地球よ。

なんじは此の人の肉体を受く。

なんぢは此の魂を何処にや送りし。

嗚呼ふびんの魂よ。

此の世にて只だ苦しみて亦た死ゆく。

高き心もなく、高き喜びもなく、

仰く神も知らず、望む光も視ず、

あなれの魂今何処にゆく可き。

宇宙は確かに宇宙なり。

人は確かに人にこそ、

なれは確かに此の宇宙の此の人なり。

然らば嗚呼！ なれが魂の救は何ぞ

なれは只だ此の地上をあこがれて過ぐ。

苦しみて過ぐ、知らず感ぜず 夢の如くに過ぐ。

神よ！ 凡ての摂理は神に在り、

此の魂の上、神ぞ知らん、ああ憐れの魂よ。

と、はかない人の一生を悲しみ、神へ祈っている。

次の詩、

嗚呼偉人よ、大なる人よ、深き人よ

仰き見る富岳、高とするに足らず、

無限の天空、其の深さ、

これぞ偉人の姿なれ、

宇宙宇宙、爾は大なり無限なり。

されど我は人なり、人なる吾、

只た仰ぐ人なる大なる人を。

泉・大洋・月・天王星！

花・鳥・電光と黒風！

ああ偉人よ爾の心は無極なる哉

吾爾を信ず。故に人間を信ず。

吾爾を信ず故に吾を信ず。

嗚呼此の無極、不思議、光明と暗黒の宇宙！

かるか故に爾も亦た無極なり。

光明と暗黒の戦争なり。

人類！爾は人類の光と花と望也。

と、偉人の偉大さを称えた詩である。

二十六日

近来雨蕭々 頭ややもすれば重し

昨夜祈祷会に出席す。

と、ある。菜種つゆの頃である。

次に

名目・称呼の世界から脱却して真実な直覚の世界にこの心を置くと、人間は始めて偉大な真実な人となり得る。思うにここから始めて本当の工夫・信仰・悟り・道念が起ってくるからである。哲人を考えるときこのことを強く感じる。凡人を見ると益々深く感じる。

次に

吾ひそかに懐ふ。

詩人、予言者の徒は三人称の世界を救ふて文とならしむに在りと。

曰く、吾、及び爾。宇宙に対し、人間に対し只だその応答にして足る。

詩人が木石・花鳥・山河を呼びてややもすれば爾と称す。

決して無義に非ず、決して偶然に非ず、彼等は実に心からして「爾」と称する也

と、記して、

宇宙は活動する霊体であり霊心である。人間はこの宇

宙に生滅する肉体である。靈魂を宿している。

一人称だけの宇宙には宗教と詩は起らない。真理は中庸にある。即ち爾と吾、この二人称にある。

男と女との調和の上に恋愛が生じる

爾と吾との調和の上に宗教が起り大きな詩が生れる。

嗚呼吾老ひねばならぬか。

地球よ、宇宙よ、爾何ものぞ。

吾は爾のうちに老ひつつある也。

嗚呼畏ろしき事実！嗚呼悲しき事実！

妄想よ去れ！夢想よ去れ！

若き吾よ！吾は老ひつつありなり。

吾何時までか二十歳ならんや二十五歳ならんや

二十七歳三十歳ならんや。十三歳は過ぎゆきぬ。

樂しかりける十五歳！十七歳も過ぎゆきぬ。

十九歳の吾が友は、はからず此世を後に消へぬ。

嗚呼吾、豈何時まで若からんや。

若き人は絶へざる可し、

されど吾は再び若からず

嗚呼吾を載する爾大魂よ！

吾をかこむ無極の宇宙よ！

吾はなれの目前に老ひつつある也。

木の葉異ならず、野の鳥と同じ。

嗚呼吾れ人！何時か朽ちなん。

行く先は只た朽ちはつる墳墓なり。

悲しき事実。畏ろしき事実。

夢想よ去れ！

吾を此事実より覆はんとする

妄想よ去れ！

何を吾が進みゆく希望となさん。

老朽か、墳墓か、嗚呼秋風か！

春ゆきてかへらず

人生の春ゆきてかへらず

此身一片の木の葉のみ。

そも此宇宙、爾は只だ恐ろしき地からなるか

吾ならぬ力！恐ろしき力！無限の力！

爾はしも、人の心は知らざるか そも人は

なれの心を知らざるか

嗚呼此身はなれのままなるか！

老ひねばならぬ此吾が身、死ねばならぬ人の身や
これで真の事実なれ

此事実深くも感ぜず浅墓に

浅き理屈を口にして深き心を

あざける慣ひ、あざけれよ、

吾は宇宙の人にして、宇宙は吾を老死さす。

訴ふるは只だ自然なり。

と、はかない人の生命を謳っている。

二十八日の記には

昨夜、富永・尾間・高橋平吉の三氏を招き、語るに
上京合宿、の事を以つてす。三氏甚だ喜び、実行を約
す。

と、ある。独歩が意とするところは、この秋には上京する
ことになるであろう。君らは実にその境遇に於て不幸
な青年である。自分は君らを救いたい。それで上京する
のは唯一つの方法である。三人とも労働にはなれている。
それで東京で各々が労働すれば食うには困ることはある
まい。それで自分は一しよに下宿して協力して勉強した
ら幸せだろうと思う。と、話した。

実は彼らの中には独歩が発議しない以前にも早や上京
のことを企てていた。独歩は驚いている。